



ニュースレター No. 36 2000年(平成12年)9月
NEWSLETTER
 INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION

財団法人 国際湖沼環境委員会

—よりよい湖沼管理をめざして—

このニュースレターには英語版もあります。

第9回世界湖沼会議



実行委員会開催
 開催の準備、本格スタート

第1回 9回世界湖沼会議実行委員会の初会合が、7月19日に大津市内のホテルで開催され、2001年11月に開催される世界湖沼会議の開催に向けての本格的な準備がスタートした。

1 1999年5月にデンマークで開催された第8回世界湖沼会議の後を受け、第9回世界湖沼会議は、2001年11月11日から16日までの日程で、滋賀県で開催されることが決定している。開催の前年である今年は、実行委員会を立ち上げ、本格的な開催準備が進められることになる。実行委員会は、全体で33名の委員から構成され、会長に国松滋賀県知事、実行委員長に山田滋賀県副知事が就任した。また、副委員

長には、ILECの吉良竜夫副理事長が就任し、ヨルゲンセンILEC科学委員長もメンバーとして参画している。

実行委員会冒頭で、國松滋賀県知事の挨拶があり、4月に開催されたG8環境大臣会合での議論を受け、20世紀型のライフスタイルのあり方を問い合わせ、環境の世纪と言われる21世紀にふさわしいあり方について議論する会議にしていくと同時に、17年ぶりに滋賀県に帰ってくる「里帰り会議」でもあることから、世界湖沼会議の原点に立ち帰った、市民、企業関係者、研究者、行政が一堂に会する会議としたいと抱負を述べた。

会議では、開催までの準備スケジュー

ルや、事業計画、予算などが審議された。なお、ヨルゲンセンILEC科学委員長から、論文公募にあたってはNGOや研究者が意見交換ができる工夫が必要であり、また、琵琶湖セッションでは、地球上の湖沼の中での琵琶湖の位置付けが明らかになる内容にしてはどうかという意見が出された。さらに、UNEP国際環境技術センターのホールズ所長からは、淡水資源を保全するという観点から会場やホテルでも節水を呼びかけるべきとの意見も出された。

今 後のスケジュールとしては、第2回案内書の発行や、論文募集、登録業務の開始など円滑な開催に向けた具体的な準備作業が進められていくことになる。

今回の話題

- BIWAKO2001第1回案内書完成
- 第2回世界水フォーラム
- G8環境大臣会合
- LakeNet 2000
- 第4回リビングレイクス会議
- 第10回生態学琵琶湖賞
- インド・ボパール湖湖沼水質保全研修
- 新刊案内と今後の行事

第9回世界湖沼会議

BIWAKO2001 第1回案内書完成

来年11月に琵琶湖で開催される第9回世界湖沼会議に向けて着々と準備は進められています。同会議の第1回案内書が完成し、会議スケジュールの概要および分科会構成などが示されています。第2回案内書は、今年11月頃の発行予定で、会議参加登録および論文募集の開始も同時に行われます。

◆ テーマ

湖沼をめぐる命といとなみへのパートナーシップ
～地球淡水資源の保全と回復の実現へ向けて～

◆ 会議スケジュール

2001年11月	全体会議等	分科会 ポスター・セッション 自由会議等	サイド プログラム
第9回世界湖沼会議	8日(木) 企画中		国際環境 ビジネス メッセ
	9日(金) 企画中		
	10日(土) 琵琶湖視察	自由会議*	
	11日(日) 登録 レセプション	自由会議	
	12日(月) 開会式、全体会議① 琵琶湖セッション① ウェルカムパーティー		
	13日(火) 琵琶湖セッション②	分科会、ポスター・セッション ワークショップ、自由会議	
	14日(水)	分科会、ポスター・セッション ワークショップ、自由会議	
	15日(木)	分科会、ポスター・セッション ワークショップ、自由会議	
	16日(金) 全体会議② 大会宣言、閉会式 フェアウェルパーティー		
	17日(土) 自由会議 ：琵琶湖体験活動		
会期後 プログラム	18日(日) 自由会議 ：琵琶湖体験活動		

全体会議①：世界湖沼会議で論じたい主要問題

全体会議②：各分科会からの報告

湖沼の環境をどのようにしていくかの具体的モデル
湖沼環境との付き合い方：自然を取り入れたこれからの暮らし

「生命（いのち）と暮らしの賑わいをこそ」
(*自由会議=各種団体の自主企画の会議等)

なお、同時に開催される「国際環境ビジネスメッセ」と主体的に連携し、また直前に開催される「国際環境計画－技術・産業・経済部国際環境技術センター（UNEP-DTIEIETC）シンポジウム」とも連携します。

◆ 会議構成

2001年第9回世界湖沼会議は、著名な科学者や活動している地域住民などが、湖沼を中心に淡水域の環境が直面する問題などを提起する基調講演や会議の集約などを行う「全体会議」、個々の課題を報告し合い議論するための「分科会」・「ポスター・セッション」、それらを踏まえて問題点の解決を探る「ワークショップ」、いろいろの分野からの参加者が交流し意見を交換するための「自由会議」などで構成されます。また、これらのすべての会議において、市民・産業関係者・研究者・行政関係者などが、ともに問題を出し合い、議論することが要請されます。

さらに、「里帰り会議」であることを充分に配慮して、参加者が琵琶湖とその周辺の過去と現状についての理解を深めるための現地視察を会議前に盛り込みました。そして、それらに基づいて琵琶湖におけるこれまでの取り組みと今後の方向性について論じるための「琵琶湖セッション」を設けます。

◆ 分科会構成

淡水環境のかかえる今日的な課題が漏れなく論議されるとともに、市民・産業関係者・研究者・行政関係者など、さまざまな分野の関係者が偏りなく参加し、互いに論議が深め合えるようにするために、以下の5つの分科会を設けます。

(第1文科会)

分化と産業の歩み

－環境共生のライフスタイルを考える－

この分科会では、湖と人間とのかかわりに関して、文化と産業という一見相反するようでいながら、実は人々の価値観を共通に構成する主題を追及する。

キーワード

環境共生の価値観、漁業資源の維持と発展、魚食文化と湖沼、生物と文化の多様性、湖沼資源の持続可能な利用、湖沼空間と景観、湖沼と観光、湖沼における「遊び」、湖上レジャー・遊漁（スポーツフィッシング）と湖沼保全、女性と湖沼環境、子どもと湖沼環境、地域社会と湖沼、内的発展・力の付与（エンパワーメント）と住民参加、環境ジャーナリズムの役割、湖沼と水利用、湖沼開発と政治、公共事業をめぐる意思決定、伝統的知恵と科学的知識、湖沼と宗教、湖沼と歴史、農林業・商工業と湖沼、湖沼の経済価値とその評価、経済政策と湖沼保全、湖沼をめぐる循環型社会の構築、環境ビジネスの振興、環境問題と世代間倫理、途上国・地球環境と湖沼

(第2分科会)

環境教育の新たな展開 —学んで・知らせて・共に活動する—

この分科会では、学校教育・生涯学習・住民運動などにおいて展開されてきた環境教育の、各地域における歴史と現状を踏まえながら、今後環境教育をどのように進めて行くべきかについての、方法論・実践論に焦点を当てて問題を追及する。

キーワード

環境教育の実践と展望、学校教育における水環境学習、水環境学習教材の開発、環境倫理、世代間倫理、水環境に対する住民意識の高揚、学校と地域の連携、伝統知恵を生かした「まちづくり」、環境保全型社会の構築、行政が住民支援に果たす役割、子どもの遊び場と水辺環境、NGOとNPOの役割と課題、住民による環境調査、地域・家庭で取り組む環境学習、環境政策プランニングと住民参加、環境保護住民団体の歴史と現状、環境破壊・改変と住民意識、環境交流と情報交換、環境アセスメントと住民参加

(第3分科会)

飲み水と汚染 —きれいで安全な水を創る—

この分科会では、水質を構成するさまざまな物質を中心に、人間のライフスタイルとも関連させて、広く「きれいで安全な水」についての問題を追及する。

キーワード

水質項目と水汚染の感覚、内分泌擾乱物質をめぐる諸問題、汚染物質の管理と浄化、水質改善のための適正な技術開発、化学物質の発生と管理、住民にとっての水質問題、下流の飲み水、農業廃水処理、工場廃水処理、生態毒性、下水処理の高度化、人工湿地、富栄養化対策、非特定汚染源対策、大気汚染と水質汚染、酸性雨、酸性化、発ガン物質、底質汚染、農薬汚染、P R T R 法、道路雨水排水、内湖および湿地の保全と復元、小型レジャー・ボートと水汚染

(第4分科会)

水辺の生態系 —壊れやすい水と陸との接点（エコトーン）を どのようにするか—

この分科会では、水と陸との接点である水辺に焦点をあてて、その歴史と現在の様相を解析し、この場所を長く有效地に利用するための哲学と方策を追及する。

キーワード

沿岸推移帯の破壊、保全・利用・管理計画、土地利用、陸・沿岸・沖縄、伝統的管理と地域住民参加、自然景観、歴史的変化、港湾と水上交通、漁業と利用、住民とレクリエーション、水位変動、汚濁浄化・水質浄化、流入河川と砂防、生物環境調査、生物多様性・水辺の生き物、湿地、固有種と外来種、河口堰と湖沼、復元・再生・創造、外来種と生態系、人造湖と生態系、遊漁（スポーツフィッシング）と生態系保全

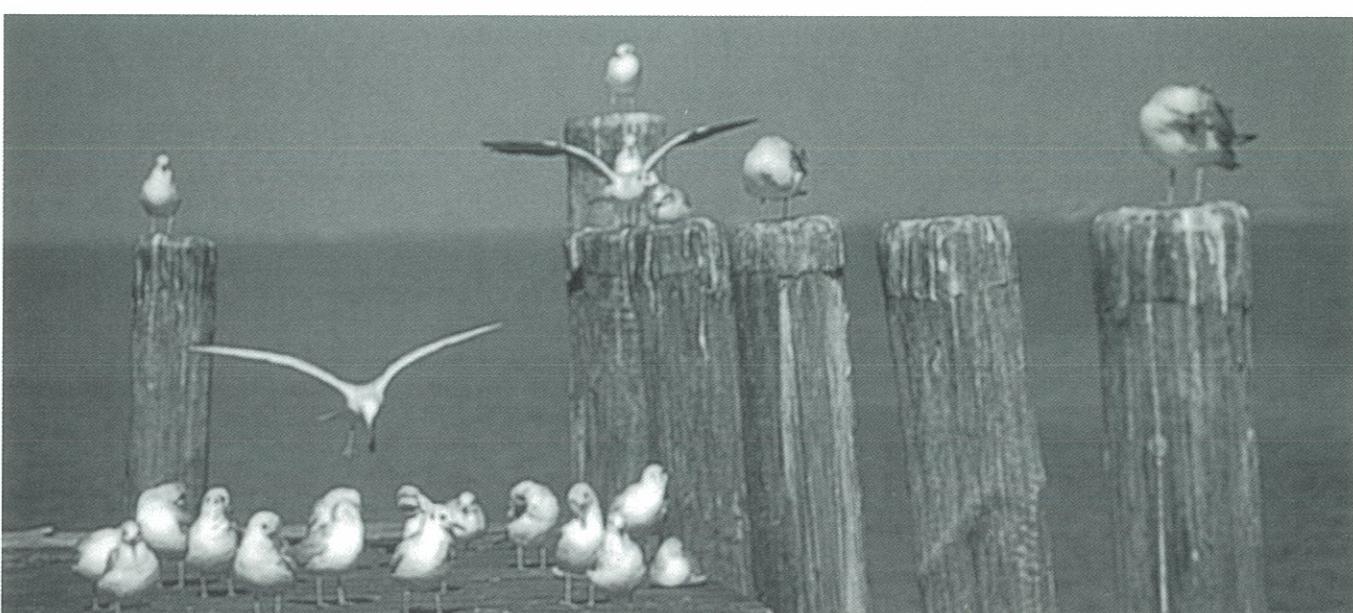
(第5分科会)

循環する水 —流域で共存する人と自然—

この分科会では、湖沼を中心にその集水域全体から海に至る流域水系全体を視野に入れて、人と自然とのかかわりについて再考する。

キーワード

非点源汚染、流域の農業、農業生態系、淡水域の漁業、養殖業、水資源利用と水資源開発、水循環・水文循環、ランドスケープ、流域の生態系、土地利用・土地被覆、流域植生、湖沼集水域の物質循環、水田、河川・水路、市街地、森林・里山、湿地の役割、地球環境と湖沼環境、酸性雨と湖沼、流域管理、上流下流関係、国際水域の保全と管理、計画、監視および評価、流域管理の制度、組織、流域共有財の利用と管理、環境管理への経済的手段の適用、発展途上国への開発と湖沼環境管理



第2回世界水フォーラム閣僚級会合

2000年3月17日から22日までオランダのハーグで第2回世界水フォーラムが開催されました。また、最終2日間の日程で閣僚級会合が行われ、「21世紀における水の安全保障に関するハーグ閣僚宣言」が採択されました。以下は同宣言をILECが仮訳をしたもので、その内容は、ニュースレターで隨時お知らせしていきます。

「21世紀における水の安全保障に関するハーグ閣僚宣言」

1 水は、我々の生活・健康および生態系にとってきわめて重要な存在であり、各国の発展においても基本的必要条件である。しかしながら、世界の女性、男性および子供達は、最も基本的なニーズに応じた十分でかつ安全な水へのアクセスに欠けている。水資源、ならびにそれを供給し維持する関連生態系は、汚染、乱用、土地利用の変化、気候変動および他の多くの要因によって危機に見舞われている。このような危機と貧困との関連性は明らかであり、最初に最も強い打撃を受けるのは貧困な人々であるからである。このことは、ひとつの簡明な結論を導く。すなわち、安いなり方は選択できないということである。もちろん、地球上にはあらゆる様々なニーズと状況が存在するが、同時に我々は21世紀における水の安全保障の提供というひとつの共通の目標を掲げている。このことは、淡水、沿岸および関連する生態系の保護ならびに改善、持続可能な開発および安定した政策の促進、あらゆる人々が健全かつ生産的な生活を導くために、与えられるコストで十分に安全な水へアクセスすること、ならびに水に関わる有害物質の危険性を被りやすいものに対する保護などを意味する。

2 このような危機は、新しいものではない。またそれに対する取り組みもされてきた。検討および決議は、1977年マルデルプラタで始まり、引き続きダブリンでも行われ、1992年リオでアジェンダ21の第18章において統合されまとめられた。その内容は、1998年パリ、国連持続可能な開発委員会第6回会合(CSD-6)および第2回世界水フォーラムと閣僚級会合においても再確認された。2002年ボンでのダブリン会合(「ダブリン+10」)でのアジェンダ21実施の10年再検討などを通じて、今後もプロセスは引き続き行わ

れる。このような会合や他の国際的会合を通じ、多くの取り決め並びに指針がつくりだされ、それを基に同声明や将来出される声明などが構築される。21世紀における水の安全保障規定の目標は、世界のあらゆる地域の専門家、事業投資者および行政官などの幅広い参加と討議による前例のないプロセスにおいて反映されている。このようなプロセスは、マラケッシュで開かれた第1回水フォーラムにおいて世界水ビジョンに乗り出したWWC(World Water Council)の重要な貢献、21世紀世界水協議会(WCW21)の設立、及びグローバル・ウォーター・パートナーシップ(GWP)による実行の枠組みの展開などから浮き上がったものである。

挑戦すべき主課題

3 水の安全保障という目的を達成するには、我々は次にあげる主要な課題への挑戦と向き合うこととなる。

基本的ニーズを満たす；安全かつ十分な水へのアクセスおよび衛生は、人間にとての基本的ニーズであり、健康と福利にとって不可欠であることを認識すること、また水管線の課程を通して、人々、特に女性に権限を与えること。

生態系の保護；持続可能な水資源管理を通して、完全な状態の生態系を保証すること。

水資源の供給；あらゆるレベルにおいての異なる水利用、また国境及び国境をまたがる水資源の場合、持続可能な河川流域管理もしくは他の適切な方法を通して、関係国家間で平和的協調性を促進し、共働作用を展開すること。

リスク管理；洪水、干ばつ、汚染および他の水に関する危険要素に対する安全保障を提供すること。

水の評価；あらゆる水利用に対する経済的、社会的、環境的および文化的価値を反映するような方法で水管線を行うこと、またそういった水供給のコストを反映せるように水管事業の価格づけを進めること。このアプローチは、平等の必要性ならびに貧困な人々や被害を被りやすいものの基本的ニーズであることを考慮する。

賢明な水行政；一般市民の参加とあらゆる事業投資家の利益が水資源管理に包括されるように、優れた行政を保証すること。

G8環境大臣会合

2000年4月7日から9日にかけて滋賀県大津市で開催されたG8環境大臣会合の概要は次のとおりです。

(環境庁仮訳)

我々々、先進主要8ヶ国の環境担当大臣と欧州委員会の環境担当委員は、1999年シエヴェリーンでの会合のフォローアップとして、2000年4月7日から9日にかけて大津市において会合を行い、困難な環境問題について議論した。議論の主要なテーマは、I.気候変動、II.21世紀における持続可能な開発とリオ+10、III.環境と健康、IV.前回までのG8環境大臣会合のフォローアップの4つであった。我々は、議長がこのコミュニケを九州・沖縄サミット議長に転達することを求める。

水は、あらゆる生物にとって不可欠で貴重な資源である。我々は、流域における環境保全上健全な管理を含む、総合的な水資源管理のアプローチを採用することによって、水資源及び生態系の保全及び洪水、干ばつ及び他の自然災害への備えを進める。我々はまた、安全な飲料水へのアクセス、適切な衛生、水利用効率の最大化及び水利用の浪費につながる補助金の廃止の重要性を認識する。我々は、供給コストを反映した水供給の価格づけに向かって前進する。我々は、国際的な淡水資源アセスメントを推進し、開発途上国キャパシティ・ビルディングと技術移転を支援するために水管線に関する我々の経験及び専門知識を十分に活用する。我々は、流域を共有する国々に対し、国境水域及び又は国境をまたがる水域のアセスメント、管理及び利用に関する合意を進展させるよう奨励する。我々は、21世紀における水の安全保障に関するハーグ閣僚宣言を歓迎する。我々はこの問題についてリオ+10における検討を促進するために、2002年にボンで開催される国際淡水会議に期待する。

会議・レポート

LakeNet 2000

2000年6月4日から8日まで、湖沼管理実践者のための国際ワークショップが、「LakeNet 2000：参加流域管理のための意見交換」と題し、米国バーモント州のコールチェスター市にあるS t. ミッセルカレッジで開催されました。

LakeNet のパートナー湖であるチャンプレン湖が主催となり、コペンハーゲンで開催されたLake99会議での集会に続く2回目の国際的集会となりました。220以上の湖沼から行政、研究機関、企業、大学および非政府組織(NGO)の代表者を含む団体指導者および湖沼管理の実践者が参加し、日本からは琵琶湖研究所の中村所長をはじめ、滋賀県立大学の学生が出席しました。

LakeNet の詳細は、

<http://www.worldlakes.org/program.htm>

でご覧になれます。

以下は、同会議に参加した学生からのレポートです。

来年2001年、滋賀県で「第9回世界湖沼会議」が開催されます。その会議中、公式プログラムで「学生セッション」の開催が決定しています。これは世界各国の学生が集まり、湖沼保全や管理における学生の役割について話し合う予定です。現在私はこの「学生セッション」の企画に参加しています。

私は学生セッションの企画者として、Lake Net2000に参加してきました。この素晴らしいチャンスに私は2つの目的を持ちました。1つ目の目的は国際会議の運営のノウハウ、特に討論の仕方を勉強しようという

もので、2つ目は、諸外国の学生の活動を学び、交流を深めるという目的です。

会議が開催された、米国バーモント州チャンプレン湖は琵琶湖によく似た湖でした。水の色は南湖に似た青緑色、地形は湖西地域に見られるような湖岸に迫った山々が印象的でした。またチャンプレン湖では湖を保全するために、活発な市民プログラムが実施されています。チャンプレン湖は、琵琶湖とは違って、米国の2州、ニューヨーク州・バーモント州とカナダのケベック州にまたがった湖です。それぞれが対立するのではなく、定期的に3州が集まり、湖の現状と将来について話し合われています。詳しいことはよく分からぬけれど、湖にとって理想の体制が整っているように思いました。Lake Netに参加するという経験は私個人の目的、そしてその他にも多くのものを与えてくれました。そのお返しとして、私は来年の「学生セッション」の成功にむけて精一杯努力することでLake Netに貢献したいと思います。

(滋賀県立大学大学院 西尾好未)



写真：会議参加者

第4回リビングレイクス会議



写真：会議会場風景

今回新たに8つのパートナー湖沼に加え、死海（イスラエル、ヨルダン、パレスチナ）、チクィータ湖（アルゼンチン）、テンギス湖（カザフスタン）、ミリチ沼（ポーランド）およびパンタナル湿地（ブラジル、巴拉グアイ、ボリビア）の5つの湖沼がパートナー湖沼の承認を受けました。

次の第5回リビングレイクス会議の開催についてもアナウンスされ、本年11月10日から14日まで“生物多様性と環境教育”というテーマで日本の琵琶湖で開催される予定です。

第4回リビングレイクス会議が、今年の6月16日から18日にかけてハノーバーのエキスポ2000の会場で開催されました。今回の会議は、“対立から協力へ：河川、湖沼および湿地を守るための有効な取り組み”というテーマで行われ、国際的NGO団体および産業界から国際的環境問題に取り組む多数の専門家達が、“対立から協力”に到達するための方法について話し合いました。開会式は、グローバルハウスのリビングレイクス展示会場で行われ、ドイツ地球自然基金(GNF)のガーハード・ティルク代表が、琵琶湖から参加した日本人25人を含む13のパートナー湖沼の代表参加者らに歓迎の挨拶を行いました。ティルク代表は、日本で万博が開催される2005年までにリビングレイクスのネットワークを世界中の30湖沼までに拡げる目標をかかげました。

会議・レポート

今回、ハノーバーで開催されたリビングレイクスの会議に出席して、ようやくリビングレイクスプロジェクトを主宰するドイツ地球自然基金（Global Nature Fund: GNF）の目指しているところが理解できたような気がする。リビングレイクスの最大の特徴は有力企業とのパートナーシップだ。特にUNILIVERとの密接な関係は、1990年からドイツの現地法人との間で始まった洗濯洗剤の共同開発プロジェクトにさかのぼる。しかし、はじめから両者の間に友好関係が存在したわけではない。むしろその逆に、80年代後半には、同社のトイレ用洗剤をめぐるGNFのボイコット運動やそれに対するUNILIVER側からの報復措置などの苛烈なまでの紛争の歴史があった。両者の歩み寄りはUNILIVERからの呼びかけによってやっと88年にはじまる。その話し合いの結果として生まれたのが上記の共同プロジェクトだ。このプロジェクトは、ドイツ国内において「もっとも環境にやさしい製品」との評価を得た洗濯洗剤を産みだすことになる。これによって両者のパートナーシップは不動のものとなった。リビングレイクスプロジェクトによって各国のNGOと企業とのパートナーシップの構築を推進するGNFの自信の源泉がそ

こにある。今回のハノーバー博も同様である。ドイツの有力環境NGOのほとんどが「EXPO NO」（万博いらない）と開催の反対にまわったなかにおいて、GNFだけが、WWF（世界自然保護基金）とともに万博に積極的に関与し、ブースまでも出展した唯一のNGOであった。EXPOを壮大なむだであるとして反対にまわったNGOの姿勢も明快であるが、逆に、万博の場を人々の環境への意識を向上させる絶好の機会と捉えたGNFの考え方も、リビングレイクスプロジェクトが産まれた背景を知れば、十分に理解できるものだ。

GNFが目指している方向だけが環境NGOにとって進むべき唯一の道だとは云えないが、確かに、リビングレイクスプロジェクトが環境NGOのこれから進むべき方向性の一翼を担っていることだけは間違いないだろう。

（井手 慎司／滋賀県立大学助教授、
湖沼会議市民ネット事務局）



写真：会議での活発な意見交換

第10回 生態学琵琶湖賞

生態学琵琶湖賞は、1991年に滋賀県が水環境またはこれに関連する分野の生態学研究の振興を目的として設けた国際賞です。受賞者は東アジア、東南アジアおよび西太平洋の地域に居住し、そこで研究活動が高く評価される方です。授賞式は2000年10月14日（土）に全国市町村国際文化研修所（大津市）で開催されますが、10回目を記念してい談も企画されています。次に今年度の二名の受賞者の方をご紹介致します。

David Dudgeon氏
香港大学生態学・生物多様性学科
主任教授

河川生態学に関する研究と分類学的な研究でアジア地域における河川生態学の底上げに大きく貢献されています。一貫して香港から熱帯アジアの河川生態と生物多様性に関する学術的情報発信を行ってきた功績は大きく、水に関連する環境問題の実務的な解決に寄与しようとする姿勢は高く評価されています。今後アジアの水界生態系の保全に大きな役割を担うものと期待されています。

山室 真澄 氏
通商産業省工業技術院地質調査所海洋地質部 主任研究官

宍道湖や中海における、窒素循環を定量的に明らかにするなかで、大型生物（二枚貝や水鳥）の役割を明らかにしました。さらに、この大型生物が少なからず窒素を除去し、プランクトンの異常発生を事前に制御している実態を明らかにしました。同氏は、現在汽水湖での研究成果にたって珊瑚礁における炭素、窒素循環の研究を積極的に押し進めておられ、今後の社会的貢献が期待されます。

湖沼会議市民ネット LAKE NET 2001のご案内

湖沼会議市民ネットは、2001年に琵琶湖で開催される次回世界湖沼会議を市民の手づくりのものとするために立ち上げられ、できるだけ多くの人に湖沼会議および会議に向けた活動に参加してもらうことを目標としています。市民ネットは、人々の湖沼会議への入り口となるだけでなく、湖沼会議を機会に私たちの街や暮らし、自然や環境について考えてもらうきっかけとなるたくさんの活動の場を用意します。8月末現在の登録件数は、268名です。たくさんの方の登録をお待ちしています。

登録受付

- 湖沼会議市民ネットホームページ <http://www.ses.usp.ac.jp/2001bihwa/>
- 湖沼会議市民ネットILEC内事務局 077-568-4574

インド・ボバール湖 湖沼水質保全研修

ILECは、開発途上国への協力事業として国際協力事業団（JICA）の委託を受け、毎年、湖沼水質保全研修を実施しています。今年はこれに加え、インド・ボバール湖湖沼管理者研修を開催することになりました。ILECでは見学コースと講義主体コースの2タイプの研修を計画し、プロジェクト管理者6名が主体の見学コースが8月2日に終了しました。参加研修員らは琵琶湖の事例研究で構成されたカリキュラムに沿って各関係機関を見学しました。研修員らは琵琶湖の湖沼管理に関する様々な事業、開発計画、仕組みなどに関心を持ち、各見学先で熱心な質疑応答が行われました。

研修生の感想を以下に紹介します。

Prashant S. Khirwadkar
ボバール湖保全管理事業
事業部副部長

イ ンド・ボバール湖保全管理事業 (Bhoj Wetland Project) の上級官のメンバーは、研修の一環であるILEC主催の現地視察で、琵琶湖および湖の保全管理事業を行う各機関を訪問しました。参加したメンバーは、JBICにより設立されたボバール湖プロジェクトに携わる管理者、計画者、科学者および実施部技師を含む専門家から構成され、マディアプラデーシュ州政府環境住宅省次官である Satyananda Mishra 氏を筆頭に計6名が参加しました。その他に管理運営コンサルタントとして同事業に参加している株式会社協和コンサルタ

ンツからプロジェクトマネージャーのK.Sセナナヤカ氏が同行しました。メンバーは、砂防ダム、大津放水路建設事業、土壌浸食管理施設、下水処理と土壤浄化システム、浄水場、養殖漁業場、水質モニタリング、固体廃棄物の収集分別処理場などを見学しました。また、水質向上に向けて実験を行う施設なども視察しました。

メンバーは、琵琶湖の規模および水質に魅了され、湖の存在が滋賀県もしくは日本だけに限らず、人類全体にとっての財産であるという印象を受けました。であるがゆえに、南湖の水質悪化の報告に関しては、どういう動きがあるのかメンバーにとって関心の的となりました。事業実施における綿密な計画、称賛に値する出来映えおよび各関係機関による精密な管理に明らかに感銘を受けました。また、新たな視野を追求するた

め、多くの施設で様々な実験が行われていることにも感動しました。博物館、様々な展示などを通じ、琵琶湖に対する一般市民の意識と教育の向上に向けて努力がされていることも印象的でした。

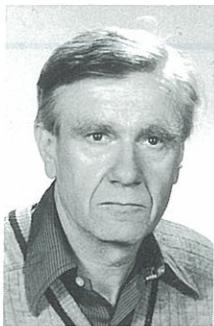
琵琶湖とボバール湖が直面している問題には共通するものがあり、問題の取り組み方についての事業のアプローチ、方法論、計画および実施に至るまで比較することができました。また、琵琶湖が抱える特有の問題とそれを解決するために実施されている方法、アプローチ、計画および実験なども観察することができました。

ILEC、特に小谷専務理事と今回の視察を綿密に計画し準備してくれた担当の山本氏に感謝を述べさせていただきます。我々にとって、たいへん勉強になり思いで深い研修となりました。



写真：研修生とILEC職員

■お知らせ■



ILEC科学委員のメンバーであるミラン・ストラスクラーバ教授が、7月に訪問先の米国で死去されました。ストラスクラーバ委員は、チェコ出身で、プランクトンの生態学、湖沼沿岸地域における生産性などを専門とし、貯水池における物理的生産プロセス、富栄養化のプロセスなど様々な水環境に関する研究に長年携わってこられました。最近では、特に ILEC ガイドラインブックシリーズの第9巻「貯水池の水質管理」の共著者として、多大な貢献をされました。

ご逝去を深くお悔やみ申し上げ、ご冥福をお祈り致します。

新刊案内

◆「湖沼と貯水池－研究と管理」第5巻

第1部 2000年3月

第2部 2000年6月

ISSN 1320 5331

年4回発行

今回のILECジャーナルは、次を含む内容が収められている。
「琵琶湖の湿地：その歴史、重要性および結末」、「湖沼の水収支の変動」、「重金属化合物による水環境の二次汚染に関する底質堆積物の役割」、「環境アセスメントおよび環境改善のためのネットワーク（NEAR）：スイス、ポーランド、ルーマニア3者の共同研究」、「ビスマルク川およびクラクフ（ポーランド）地域における下水処理場からの廃棄物中における金属の分配」など

ジャーナル購読についてのお問い合わせ先：

ジャーナルホームページ

www.blackwell-science.com/lre

Journal Subscriptions, Blackwell Science Asia

PO Box 378 (54 University Street) Carlton South, Victoria,
3053, Australia

Tel: +61 3 9347 0300 Fax: +61 3 9347 5001

Email: subscriptions@blacksci-asia.com.au

◆「ガイドラインブック第2巻-

湖沼環境管理の社会経済的側面-」タイ語版

橋本道夫、B.F.D.パレット 共編

W. サマナセナ 翻訳

ISBN 4-906356-06-0

◆「ガイドラインブックシリーズ第1巻-

湖沼管理の基本原理-」ポルトガル語版

『DIRETRIZES PARA O GERENCIAMENTO DE LAGOS
Vol. 1

Principios para o Gerenciamento de Lagos】

S.E.ヨルゲンセン、R.A.フォーレンヴァイダー 共編

D.バンヌッチ 翻訳

J.G.ツンディシ ポルトガル語版編集

ISBN 85-87418-03-3

問い合わせ先：

Instituto Internacional de Ecologia

Rua Bento Carlos, 750

13560-660- Sao Carlos, SP, Brasil

E-mail: iie@zaz.com.br

今後の行事

◆第9回世界湖沼会議企画委員会

期日：2000年9月2日（土）、10月21日（土）

13:30～17:00

場所：滋賀県大津市 ピアザ淡海

◆（社）日本水環境学会関西支部市民シンポジウム

「水環境問題における研究活動と市民活動の役割

一学会とNGOに何が求められているかー」

期日：2000年9月13日（水）13:00～17:00

場所：摂南大学寝屋川キャンパス7号館725教室

連絡先：（社）日本水環境学会関西支部事務局

天野耕二（立命館大学理工学部環境システム工学科）

Tel: 077-561-2742 Fax: 077-561-2667

E-mail: amano@se.ritsumei.ac.jp

参加費無料

◆第10回生態学琵琶湖賞授賞式

期日：2000年10月14日（土）

12:30～17:00

場所：滋賀県大津市 全国市町村国際文化研修所

連絡先：滋賀県琵琶湖環境部環境政策課内

「生態学琵琶湖賞」事務局

Tel: 077-528-3451 Fax: 077-528-4844

E-mail: de00@pref.shiga.jp

<http://www.ilec.or.jp/prize/j-index.html>

◆第4回底質環境評価国際シンポジウム (SQA4)

期日：2000年10月24日（火）～27日（金）

場所：ピアザ淡海（滋賀県大津市におの浜1-1-20）

連絡先：琵琶湖研究所（担当：焦 春萌、木村 康二）

Tel: 077-526-4690 Fax: 077-526-4803

E-mail: sqa4@lbri.go.jp (<http://www.lbri.go.jp>)

◆第5回リビングレイクス会議

○NGO国際ワークショップ

期日：2000年11月10日（金）～14日（火）

場所：滋賀県 近江八幡厚生年金休暇センターおよび草津市役所内会議室

○学生国際ワークショップ

期日：2000年11月10日（金）～14日（火）

場所：琵琶湖研究所および立命館大学草津キャンパス

連絡先：財団法人国際湖沼環境委員会事務局

湖沼会議市民ネット事務局

■彦根事務局 TEL/FAX: (0749)-28-8346,

E-mail: 2001biwa@ses.usp.ac.jp

■ILEC内事務局

TEL:(077)-568-4574, FAX:(077)-568-4568,

E-mail: lakenet@mail.ilec.or.jp



INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION

Secretariat

1091, Oroshimo-cho, Kusatsu-city, Shiga 525-0001, Japan

Tel : +81-77-568-4567

Fax : +81-77-568-4568

e-mail : info@mail.ilec.or.jp

URL <http://www.ilec.or.jp/>

財団法人 国際湖沼環境委員会事務局

〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091

TEL: 077-568-4567 FAX: 077-568-4568